

大祓詞

(六月晦大祓祝詞)

(2020年)令和2年4月 藤代歴史愛好会 (石山博)

(ミナズキのツゴモリのオオハラへのノリト)

1. 神を祭り神に祈るとき、申し述べる古体の文章。

2. 祝詞の意味(祝詞とは): 祝詞とは、神事の行事で**神主**が神前で唱える言葉のことをいいます。日本人は古くから、言葉には魂があると信じてきました。これを「言霊：ことだま」と言います。神さまにお願いごとをする時や、感謝の気持ちを表すときには「言霊」を込めて読み上げるというのが、祝詞の意味です。「言霊」は言葉に出したことがそのままかなうといわれます。

祝詞を声に出して読むことを奏上(そうじょう：天子に申し上げること)といわれます。奏上することで、一層のご加護があるとされています。祝詞の代表的なものに、大祓詞(おおはらえのことば)、**神棚**拝詞(注1：かみだなはいし)、**神社**拝詞(じんじゃはいし)、略拝詞(りゃくはいし)などがあります。

「大祓詞」は**仏教**の「注2：般若心経」にあたるものです。天児屋根命(注3：あまのこやねのみこと)が作ったものとされています。

祝詞の実際:祝詞は、お祭りの度に奉書紙に墨書きします。紙は七折れ半に折り、開いてから折り目に沿って書き込みます。最初の欄と最後の半分の折れた部分には書かずに空欄にします。最後の欄まで文字が入るようにすることと、一番上に送り仮名がこないように書くのが決まりです。行の上下をそろえて、一つの欄の行数を合わせるように書きましょう。

3. 大祓詞・大祓式(おおはらえしき)とは: 毎年旧暦の六月と十二月の晦日(みそか)に御所の朱雀門(すざくもん)で行われた「大祓式」で皇族以下百官に宣下した祝詞が「大祓詞(延喜式(927年))」です。(中臣祭文なかとみのさいもん、中臣祓なかとみのはらへとも言われます)

祓物(はらえつもの)を出して、祓戸の神の神威によって罪穢(つみけがれ)を解除(げじょ)する儀式であり、半年毎に恒例のものとしておこなわれるので「二季の祓」と称します。大祓式で唱えられる祝詞が「大祓詞(おおはらえのことば)です。

大祓は六月と十二月の末日に半年間の罪や穢(けが)れを祓(はら)うもので、イザナギノ命の「禊祓みそぎはらえ」が原型です。

大祓詞を奏上して、身体や心(精神)に滞(とどこお)った「汚穢(おえ)」を、ハラエとミソギでぬぐい去ります。「ハラエ」は、大麻(おおぬぎ)を用いて祓い、「ミソギ」は水で身体を洗います。大祓詞は大まかに、天皇の命により祓の神々に、罪、災い、汚穢(おえ)を移し、海原に出て流し捨て去る、という内容です。

送り仮名として使われている漢字は万葉仮名で、約900字の漢字で成り立っています。「祓」の行事は神話にも語られており、もっと以前からおこなわれていたが、大祓詞の成立は平安期以前といわれています。大きく二段に分かれていて、前段は豊葦原瑞穂国(とよあしはらのみずほのくに)、つまり日本国の成り立ちが語られ、後段では「祓」をおこなうと罪穢がどのように消滅するかが語られています。文体は「宣命体」です。天皇が大衆に降ろした命令ということです。

宣命(せんみょう)とは、天皇の命令を漢字だけの和文体で記した文書です。そしてその文体を宣命体(一たい)といい、その表記法を宣命書(-がき)、また宣命を読み上げる使者を宣命使(-し)、宣命を記す紙を宣命紙(-し)といわれます。

かつて大祓詞は大祓式の参列者に向けて読まれたものでしたが、今日では神に向け奏上するようになりました。

4.大祓詞 - 延喜式祝詞から(注:4)

みなづきのつごもりのおおはらへ(しはすはこれにならへ) 六月晦大祓 (十二月は之に准へ)

うごなはりはべるみこたち おほきみたち まへつぎみたち もものつかさのひとども もろもろききたまへよと のたまふ

集はり侍る親王 諸王 諸臣 百官人等 諸間食へよと宣ふ

すめらがみかどにつかへまつる ひれかくるとものを たすきかくるとものを ゆぎおふとものを
たちはくとものを

天皇が朝廷に仕奉る 比礼挂くる伴男 手襖挂くる伴男 鞆負ふ伴男 劔佩く伴男

とものをのやそとものををはじめて つかさづかさにつかへまつるひとどもの あやまちおかしけむ
くさぐさのつみを

伴男の八十伴男を始めて 官官に仕奉る人等の 過犯しけむ雑雑の罪を

ことしみなづきのつごもりのおおはらへに はらいたまひきよめたまふことを もろもろききたまへ
よと のたまふ

今年六月の晦の大祓に 祓給ひ清給ふ事を 諸間食へよと宣ふ

たかまのはらにかむづまります すめむつかみろぎかむろみのみこともちて

高天原に神留り坐す 皇親神漏岐神漏美の命以ちて (「注:天孫降臨説話〜」)

やほよろづのかみたちを かむつどへにつどへたまひ かむはかりにかはりたまひて あがすめみまの
みことは

八百万の神等を 神集へに集へ賜ひ 神議に議賜て 我が皇孫之尊は

とよあしはらのみづほのくにを やすくにとたひらけくしろしめせとことよさしまつりき

豊葦原の水穂の国を 安国と平けく所知食と事依し奉き

かくよさしまつりしくぬちに あらぶるかみたちをば かむとはしにとはしたまひ かむはらひには
らひて

如此依し奉し国中に 荒振神達をば 神問しに問し賜ひ 神掃に掃賜ひて

こととひしいはね こだち くさのかきはをもことやめて

語問し磐根 樹立 草の垣葉をも語止て

あまのいはくらはなち あまのやへぐもをいつのちわきにちわきて あまくだしよさしまつりき

天磐座放ち 天の八重雲を伊頭の千別に千別て 天降依し奉き

かくよさしまつりしよものくになかと おおやまとひたかみのくにをやすくにとさだめまつりて

如此依さし奉し四方の国中と 大倭日高見之国を安国と定奉て

したついはねにみやばしらふとしきたて たかまのはらにちぎたかしりて

下津磐根に宮柱太敷立て 高天原に千木高知て

すめみまのみことのみづのみあらかつかへまつりて あまのみかげ ひのみかげとかくりまして

皇御孫之命の美頭の御舍仕奉て 天之御蔭 日之御蔭と隠坐て

やすくにとたひらけくしろしめさむくぬちに なりいでむあまのますひとらが あやまちおかしけむ
くさぐさのつみごとは

安国と平けく所知食む国中に 成出む天の益人等が 過犯けむ雑々の罪事は

あまつつみと あぜはなち みぞうめ ひはなち しきまき くしざし いきはぎ さかはぎ くそ
へここだくのつみを（「注：天津罪部分～」）

天津罪と 畦放 溝埋 樋放 頻蒔 串刺 生剥 逆剥 屎戸 許々太久の罪を

あまつつみとのりわけて

天津罪と法別て

くにつつみと いきはだたち しにはだたち しろひと こくみ おのがははおかせるつみ おのが
こおかせるつみ（「注：国津罪部分～」）

国津罪と 生膚断 死膚断 白人 胡久美 己が母犯罪 己が子犯罪

ははとことおかせるつみ ことははとおかせるつみ けものおかせるつみ

母と子と犯罪 子と母と犯罪 畜犯罪

はふむしのわざわひ たかつかみのわざわひ たかつとりのわざわひ

昆虫の災 高津神の災 高津鳥の災

けものたふしまじものせるつみ ここだくのつみいでむ

畜仆し蟲物為罪 許々太久の罪出でむ

かくいでは あまつみやごともちて おおなかとみ あまつかなぎをもとうちきりすえうちたちて
如此出ば 天津宮事以て 大中臣 天津金木を本打切末打断て

ちぐらのおきくらにおきたらはして あまつすがそをもとかりたちすえかりきりて

千座の置座に置足はして 天津菅曾を本蒔断末蒔切て

やはりにとりさきて あまつのりとのふとのりのごとをのれ

八針に取辟て 天津祝詞の太祝詞事を宣れ

かくのらば あまつかみはあまのいはとおしひらきて あまのやへぐもをいつのちわきにちわきて
きこしめさむ

如此乃良ば 天津神は天磐門を押披て 天之八重雲を伊頭の千別に千別て聞食む

くにつかみはたかやまのすえひきやまのすえにのぼりまして

国津神は高山乃末短山之末に登坐して

たかやまのいほりひきやまのいほりをかきわけてきこしめさむ

高山の伊穗理短山の伊穗理を撥別て所聞食む

かくきこしめしてば すめみまのみことのみかどをはじめて あまのしたよものくには つみとい
ふつみはあらじと

如此所聞食てば 皇御孫之命の朝廷を始て 天下四方国には 罪と云ふ罪は不在と

しなとのかぜのあまのやへぐもをふきはなつことのごとく
科戸之風の天之八重雲を吹放事之如く

あしたのみきりゆうべのみきりを あさかぜゆうかぜのふきはらふことのごとく
朝之御霧夕之御霧を 朝風夕風の吹掃事之如く

おおつべにおるおおふねを へときはなちともときはなちて おおうなばらにおしはなつことのごとく
大津辺に居る大船を 舳解放艫解放て 大海原に押放事之如く

おちかたのしげきがもとをやきがまのとがまもちて のこるつみはあらじと はらひたまひきよめたまふことを
彼方之繁木が本を 焼鎌の敏鎌以て打掃事之如く 遺る罪は不在と 祓賜ひ清賜事を

たかやまのすえひきやまのすえより さくなだりにおちたきつはやかわのせにますせおりつひめといふかみ（「注：根国底之国へ穢を流す部分～」）
高山之末短山之末より 佐久那太理に落多支都速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云神

おおうなばらにもちいでなむ かくもちいでいなば
大海原に持出なむ 如此持出往ば

あらしほのしほのやほぢのしほのやほあひにますはやあきつひめといふかみ
荒塩之塩の八百道の八塩道之塩の八百会に坐す速開都比咩と云神

もちかかのみてむ かくかかのみてば いぶきどにますいぶきどぬしといふかみ ねのくにそのくににいぶきはなちてむ
持可可吞てむ 如此可可吞てば 気吹戸に坐す気吹主と云神 根国底之国に気吹放てむ

かくいぶきはなちてば ねのくにそのくににますはやさすらひめといふかみ もちさすらひうしなひてむ
如此気吹放てば 根国底之国に坐す速佐須良比咩と云神 持佐須良比失てむ

かくうしなひてば きょうよりはじめてつみというふつみはあらじと
如此失てば 今日より始て罪と云ふ罪は不在と

たかまのはらにみみふりたててきくものと うまひきたて
高天原に耳振立聞物と 馬牽立て

ことしみなづきのつごもりのひの ゆふひのくだちのおおはらへに
今年六月の晦日の 夕日之降の大祓に

はらひたまひきよめたまふことを もろもろききたまへよとのたまふ
祓給ひ清給ふ事を 諸聞食へよと宣ふ

よくにのうらべども おおかわぢにもちまかりいでて はらへやれとのる
四国の卜部等 大川道に持ち退り出でて 祓へ却れと宣る

5. 『六月晦大祓祝詞』 について（解説）

ここで取りあげた祝詞は、「六月晦大祓祝詞（ミナズキのツゴモリのオオハラへのノリト）」、つまり「大祓（オオハラヘ）の祝詞（ノリト）」というものです。日本人は、大晦におおはらい・大掃除をして、正月をむかる。そうした習わし（慣習）が、今でも残っています。

ところが、この祝詞には「六月晦大祓祝詞（ミナズキのツゴモリのオオハラへのノリト）」とあります。「ミナヅキ」というのは、六月です。晦（ツゴモリ）というのは、三十日です。この「六月晦大祓祝詞」というものがありまして「十二月（シハス）はこれに准（ナラ）へ。」と、このように書いてあります。さて、この「大祓（オオハラヘ）の祝詞（ノリト）」では、十二月と六月の二つあるということが、まず分かります。

師走というのは十二月だけだけではなく、六月と（一年に）二回することになっています。これも非常に重要なことです。実は『古事記』などで、天皇の寿命がたいへん長い。百二十歳とか、百三十歳とか書かれていたので、あんなものはインチキだと言われていた時期がありました。実はそうではなくて、これは「六ヶ月を一年と考える。そういう暦があった。」という説（考え方）があります。

時代的には、すくなくとも弥生にはあった。おそらく縄文にさかのぼると考えられています。実はこれを証明しているのは、『三国志魏志倭人伝』、その中に（注5：倭人の寿命は九十歳ぐらいだということが書いてあります）が。すごく長生き、そう思われるかも知れませんが、じつは、それは半年を一年とする暦で考えると。実は四十五歳。かれらは四十五歳まで生きるということを表現していることになります。『魏志倭人伝』に「注6：六ヶ月を一年と考える暦」の倭人のすがたが示されていると考える事が出来ます。

『古事記』『日本書紀』の（注7：天皇の寿命）が、百二十・三十になっているというのも、やはり二分の一にしますと、四十すこしになる。だから考古学的にも「弥生時代の平均寿命は30~40歳ぐらい」と言われていまして、非常にリアリティーがあり、信用できる。そういう説です。「六ヶ月を一年と考える暦」という考え方が、実はなんのことはない。「大祓の祝詞」をみれば、六ヶ月を一年と考えている。これは六月と十二月の大祓を一年を二つに分けていた。そういう暦（習慣）があったと考えられます。

つぎに、いちばん重要なところ、興味深いところを読んでみますと、六月晦大祓祝詞・・・
高天の原に神留りまし、皇親神ろき・神ろきの命もちて、八百萬の神等を神集へ集めたまひ、神議り（かみはかり）議りたまひて、『我が皇御孫（すめみま）の命は、豊蘆原の水穂の國の、安國と平らけくしろしめせ』と事依しまつき。（中略・・・4.大祓詞—延喜式祝詞から を参照のこと。）
天の磐座放れ、天八重雲をいつの千別きに千別きて、天降し依さしまつき。
・・・ これはなにのことを言っているのか。「天孫降臨」ということを言っています。

つまり出発点は高天原、アマクニと呼ばれる「天国」というところが出発点となり、そこに有名な神様ですが、天照大神の孫のニニギノ命（迹迹芸命）は、これから筑紫の日向（ひなた）の高千穂のクシフル岳、そこに行け。と言われて、孫のニニギノ命が言う通り降っていった。そういう一節が、『古事記』にも『日本書紀』にもあります。祝詞にも、たいていこれが出てきます。この「天高原」をなにが宇宙船がとんでいる天上と考えておられるかたが居ますが、そんなところから古代に降りてこれるはずがない訳で、戦後はぎゃくに、あれは作り話だということになりました。戦後そう習ってきた人が多いはず。「高天原はなかった」ということが、今は通説になっています。

これは両方とも違って間違っていると思います。高天原（たかあまはら）・天国（あまくに）。これは「アマ」を「天（テン）」という字を書くから、字にだまされるので、今でも海に潜って貝をとる女性のことを海女（あま）と言いますが、その海人（あま）です。要するに現代人の言い方をすると海洋民族です。海の人々、海の国という意味が、天国（海人国、アマクニ）です。

『古事記』などで対馬海流上、朝鮮半島と九州の間にある島々は「天の○○」、「注8：天の○○○」とみな呼ばれています。いわゆる「国産み神話」部分です。

それは、いつの時代から、そう呼ばれているのかということ『古事記』のあるのは弥生時代。弥生時代以前から、そういう古い呼び方があったということが『古事記』の先頭部分に書かれています。

それともう一つは、「天降（アマクダル）」と言われている神話がありますが、天降った場所が三ヶ所しかない。一ヶ所は筑紫（現地の人はチクシと呼んでいます）、今の福岡県。もう一つは出雲で、島根県です。もう一つは新羅で、朝鮮半島です。この三ヶ所しか天降っていません。全部、海に面したところばかりです。つまり、対馬海峡の壱岐・対馬を原点にした、その周辺なのです。

現在の福岡県、島根県、韓国新羅へ、どこから天降ったかということ壱岐・対馬から、つまり海上の国（海洋民族の国）から、その天国（アマクニ）から、天降ったと考えられるのです。今でも電車等は、上り・下りと言っていますが、基点の（アマクニ）から行くのが下りで、戻るのがの上りです。このように理解すると、ひじょうにスッキリ理解できます。

現に壱岐・対馬の、今の壱岐島の対馬に相對したところに天原（あまのはら）という地名があります。どんな字を書くのかということ。「天（テン）」の「原（ハラ）」という字を書きます。その壱岐（島）の「天原」から銅鉾が何本か出ているところです。「天原（あまのはら）」という地名まであります。

そういうことで天国・高天原は壱岐・対馬の海上の島々ということになります。これを中心にする場所を天国（アマクニ）と言います。「高（タカ）」は尊敬の言葉で、高天原（タカアマハラ）を、このように呼んでいます。（「高（タカ）」は尊敬の字で、高い、低いの意味ではないわけです。）

つぎは、今言った「天孫降臨」はどこへ降りたのかという問題です。これは「筑紫の日向の高千穂のクシフルダケ」と出ています。筑紫（ツクシ）はどう読んでも福岡県で、福岡県のなかで「日向（ひなた）」と字を書いている場所がありまして、これは「ヒュウガ」ではなくて「ヒナタ」と読みます。博多の西の端のほうに室見川という川があります。この室見川の上流に近いところに「日向（ひなた）」という字地名があります。

その地名は、今でもあります。その西側に高祖山連峰というものがあります。「高い祖」と書いて高祖（タカス）と読みます。そこには日向（ひなた）山があり、その隣に日向（ひなた）峠がある。日（ひなた）向峠のほうから、東のほうへ流れている川が日（ひなた）向川。その日向川が室見川に合流した平地のところが字日向（ヒナタ）。ヒナタだらけ。今でも、そのあたり一帯をヒナタと呼んでいるわけです。

「天孫降臨」の場所は、「筑紫の日向」と呼んでいるわけですから、他にも日向（ヒナタ）とよぶところは日本中あるでしょうが「筑紫の日向」と言えばそこしかない。しかも、そこが決定的なのは高祖山連峰のところにクシフルダケというところがあるからです。

漢字ではいろいろな字を書きますが、カタカナで「クシフルダケ」と考えていただいたら良いと思いますが。その「クシフルダケ」というところに天降ったと『古事記』『日本書紀』でも言われてい

ます。博多（福岡市）と前原市とのあいだに、高祖（タカス）山連峰のところに「クシフルダケ」というところがあるのです。場所はちゃんと筑紫のなかです。ですから筑紫があり、日向（ヒナタ）があり、高千穂としての高祖（タカス）山連峰があり、クシフルダケがあり、（『古事記』『日本書紀』では）「筑紫の日向の高千穂のクシフルダケ」へ、そこへ天降ったと言っているわけです。

ですから天照（あまてらす）の孫は、もちろん軍勢を引き連れてそこを占領したと言っているのです。ほかの祝詞でもそうですが、「天孫降臨」という事件が語られております。それは、歴史的事件であって、けっして単なるおとぎ話や想像ではないと思います。

どういう事件かと言いますと、原点になっているのは、壱岐・対馬の天国（あまくに 海土国）で、大陸からの金属器を、最初に手に入れた人たちのいるところ。その人たちが縄文稲作で有名な博多湾岸へ、そこを支配しようとして侵入軍を派遣した。それが高祖（たかす）山、そこは砦であると思いますが、そこを支配して、日本列島の西日本を支配するにいたった。

そういうことを述べているのが、「天孫降臨」という名の事件だと思うのです。『日本書紀』などでは、これを南九州のような感じで書いてありますが、「船で、行けるところではないので、天上（宇宙）から天降ったことになってしまう。」そう理解すると、矛盾を生じて空想話に、せざるを得なくなります。

考古学的には「注9：三種の神器」をもったお墓が集中して出てくるのが、今の高祖山連峰の東側と西側にある（吉武高木、三雲、須玖岡本、平原などの遺跡）なのです。南九州にはまったく出てきません。それと弥生時代の前期の終り、中期の初め。それは紀元前二〇〇年頃ですが、福岡県では出土物が一変します。「三種の神器」が出てくるのは、紀元前二〇〇年以後しか出てきません。出土物が一変しますので、やはり征服と被征服がおこなわれた証拠と考えられるわけです。

そういうことから見ますと、「大祓（オオハラヘ）の祝詞（ノリト）」で見ました罪。「大祓祝詞」ではらう罪がたくさんと書いてあります。その罪に二種類あって、「天つ罪」と「国つ罪」と二つに分けて書いてある。「天つ罪」というのは比較的へいぼんな罪で、田んぼの溝をこわすとか、田んぼの溝を埋めるとか。水を流す樋を壊して他のところへ水を持っていってしまう罪など、農業生活では罪としてはありがちな罪、してはいけないこと、それをタブーというか罪としてあげてあります。

ところが「国つ罪」のほうには、たくさん罪がありますが奇怪な罪があります。ひとつ特徴のある罪を言いますと、「母と子とを犯せる罪」「子と母とを犯せる罪」。これは母と子と、子と母と、反対になっているわけです。これは一体なんだろう、と思いました。

お母さんと子供。言葉から見ますと、これは両方とも女性だと思います。子供のほうも女性です。女の子です。娘です。お母さんも女性です。これを両方とも犯したる罪と言っているのです。ですから犯すほうは男性です。とうぜん男性がお母さんと娘と一緒に犯す。そういう罪があげられています。ちょっと、ふつうでは考えにくいことなのです。ところがこういうことが起こりうる時期があるわけです。要するに戦争のときです。征服と被征服という大激変がありますと、征服者が被征服者の娘や母を犯すという行為が、あってならないことですが起きることがある。日常生活では、ないとは言えないが、極めて少ない。ところが、いまの戦争という直後動乱の状況では、こういうことが、しばしば起こりうるのではないかと思われま。

弥生時代前期の終り、中期の初め。BC二〇〇年前後の弥生時代中期の初まりの時期に。すくなくとも福岡県あたりで大激変があったと考えられる。

その背景になったのは、壱岐・対馬の人々が大陸・朝鮮半島から金属器を手に入れた。その金属器を持っているほうと持っていないほうとは、ぜんぜん武力が段違いに違うわけです。もちろん彼らは海洋民ですから、当時でいちばん早く物や人を運ぶ船というものを持っているわけです。そこに鉄や銅の武器を持っていると圧倒的な武力の差を生じた。その状況の中での征服・被征服があった。

「天孫降臨」と美しく言っているけれども、歴史上の事実としては征服・被征服だった。ところが征服・被征服と、言葉で言えば簡単ですが、その中でいろいろな悲劇が起きたことが、想定されます。それが「国つ罪」として、たくさんあげてあるわけです。

ひとつだけ例を挙げておきますと。被征服民、負けたほうの悲劇は、状況として、男は殺されているわけです。夫や父親は殺されているわけです。そんな中で残された女性たちは、犯される。征服者から言えば犯す。それを罪と言って、その罪をチャラにする祭祀、それが「大祓（おおはらい）」ということになります。

戦争をするということは異民族かということ、広い意味では同一民族でしょうが、同一民族の中でもいろいろ種族が違いますから、その意味では同じ種族ではないと思われま。おなじ種族ではなくて、それがその時に大きな戦争が起きて、それがこうして、ずっと語り継がれてきてるとするのは、とてもショッキングなことです。それに、この祝詞は犯したほうの征服者の立場で作っております。

征服者の立場で作ったから残ったのかということ、しかし、その場合、負けたほうで民衆は存在しています。その場で、祝詞が唱えられる。そうすると、罪を犯したけれども、言いようのない罪だったけれども、大祓の祭祀でそれを消してしまいたい。平時になれば、そんなことはそうありませんから。和解をしようではないか。そういう意味のなまなましい内容を持ったものがこの祝詞（のりと）なのだと思えます。

祝詞というのは、ある意味で謝罪の気持ちを持っていると言えるのではないかと、考えられます。だから負けた側の民衆のほうでは、征服者があのような祭祀の場で、征服者がちゃんと自分たちの犯したことを罪として挙げ、悔いているというか謝罪している。そういう感じを持つかも知れません。

それと、もう一つ注目すべきところは、「この罪を川に流し・・・」とあり、実際は祭祀に使った榊（さかき）などいろいろなものを、川に流すのかも知れませんが。それが海に出て、ずっと流れ着いて根の国、底の国に行く。こう祝詞で言っています。「根の国、底の国に坐す速さすらひめという神、持ちさすらひ失ひてむ。」と書かれていますが、「根の国、底の国」というと出雲のことです。

『古事記』『日本書紀』に何回も「根の国、底の国」という言葉が出てきます。それが出雲の方角を指しているようです。それで海流によって出雲にながれるということは、博多湾岸であれば、海流によって出雲に流れていく。ですからこの祝詞の表現の、舞台が今の福岡県で作られたと考えることができます。

その後に、九州からやってきた神武天皇の勢力（後の近畿天皇家）が、九州の分家になると考えると、本家が北部九州となります。同じ三種の神器をいただいた分家が近畿天皇家という関係になるのですが、その近畿天皇家が大和中心に読み替えて使って現在に至っていると考えられます。そう考えないとすべてが神話というか空想話になってしまいます。

これが祝詞というものの、おおきな性格で、『古事記』を読んでいくとそのように理解せざるを得ないようですが、ところが『祝詞（のりと）』には、その時のいま言ったなまなましい記録が、声が残っている。『古事記』『日本書紀』をいくら読んでも、いま言ったような生々しい記録は出てきません。もっと上品なことばで書いてある。これに比べれば、『祝詞』というのは『古事記』『日本書紀』には、書くのをはばかるような記録があちこちに書いてあります。

もう一つだけ例をあげれば、生きた人間・死んだ人間の肌を断つ罪（生膚断ち・死膚断ち）と書いてある。これは、つまり刺青というのは身分をあらわしていた。貴重な、後の家紋のようなもので、からだに家紋を付けているようなものでありまして。それを負けたほうの膚を切り取ってしまうので、それは負けたほうに対する最高の侮辱でもあります。

それも罪として、大祓（おおはらい）ではらいましよう祝詞にあります。ホントになまなましい表現が祝詞（のりと）の中にあふれているのです。われわれは、それを知らずに祝詞を聞いていますが、すごい歴史の痕跡です。人々の指紋のように残っているというか込められている、人々の嘆きや悲しみが、怒りや滅んでいった人々の声もそこから知ることができるのではないのでしょうか。

そうすると。めでたい。めでたいというばかりのものではなく。そういう意味では、深みがあるというか、忘れずというか、歴史の経験を伝えて（続けて）いる。そういうものが祝詞であり。今回あげた祝詞以外にも、いろいろな深い歴史の生の声として中に残しているのが『祝詞（のりと）』だと思われれます。

歴史というのは、どうしても勝者側のものが残ってしまうのですが、これも同じく勝者側が文面をつくっているのですが、しかし敗者側の悲しみや恨みが、ひしひし聞こえる形で勝者側が作っているのです。ぜんぶ勝者側で「天孫降臨」という言葉にしていまいますと、敗者側の心に通じないというか、霧がかかってははっきりしない。ところが祝詞はそれを美化してしまわないで、その時のトゲをしっかりと棘とげとして伝えている。これが『祝詞（のりと）』のすばらしいところだと思います。（了）

参考資料:

注1 「神棚拝詞」

此れの神床に坐す（これのかむどこにます）

掛けまくも畏き天照大神（かけまくもかしこきあまてらすおおかみ）

産土大神等（うぶすなのおおかみたち）

諸々の大神等の大前に（もろもろのおおかみたちのおおまえに）

恐み恐みも白さく（かしこみかしこみももうさく）

大神達の広き厚き御恵みを辱み奉り（おおかみたちのひろきあつきみめぐみを かたじけなみまつり）

高き尊き神教のまにまに（たかきとおときみおしえのまにまに）

直き正しき真心持ちてな（おきただしき まごころもちて）

誠の道に違ふことなく（まことのみちに たがふことなく）

負ひ持つ業に励ましめ給ひ（おひもつわざに はげましめたまひ）

家門高く（いえかどたかく）

身健に（みすこやかに）

世の為人の為に尽くさしめ給へと（よのためひとのために つくさしめたまへと）

恐み恐みも白す（かしこみかしこみももうす）

「天津祝詞」

高天原爾（たかあまのはらに）
神留坐須（かむつまります）
神漏岐（かむろき）
神漏美乃（かむろみの）
命以知氏（みこともちて）
皇親神伊邪那岐乃大神（すめみおやかむいさなきのおほかみ）
筑紫（つくし）
日向乃（ひむかの）
橘乃（たちばなの）
小門乃（をとの）
阿波岐原爾（あはきはらに）
禊祓比給布時爾（みそきはらひたまふときに）
生坐世留（あれませる）
祓戸乃大神等（はらへとのおほかみたち）
諸々禍事罪穢乎（もろもろまかことつみけかれを）
祓閉給比（はらへたまひ）
清米給布登（きよめたまふと）
申須事乃由乎（まをすことのよしを）
天津神（あまつかみ）
地津神（くにつかみ）
八百万神等共爾（ほよろつのかみたちともに）
天乃斑駒乃（あめのふちこまの）
耳振立氏（みみふりたてて）
間食世登（きこしめせと）
畏美畏美母白須略拜詞（かしこみかしこみもまをす）
祓ひ給ひ清め給（はらいたまいきよめたまえ）
守り給ひ幸へ給へ（まもりたまいさきわえたまえ）

「略拜詞りゃくはいし」

祓(はらへ)給(たまへ)
清(きよめ)給(たまへ)
守(まもり)給(たまへ)
幸(さきはへ)給(たまへ)

注2：『般若心経』（はんにゃしんぎょう）、正式名称『般若波羅蜜多心経』（はんにゃはらみったしんぎょう、प्रज्ञापारमिताहृदय、Prajñā-pāramitā-hṛdaya、プラジュニャパーラミター・フリダヤ）は、大乘仏教の空・般若思想を説いた経典で、般若経の1つともされる。僅か300字足らずの本文に大乘仏教の心髄が説かれているとされ、複数の宗派において読誦経典の一つとして広く用いられている。

注3：天兒屋根命（あまのこやねのみこと）岩戸隠れの際、岩戸の前で祝詞を唱え、天照大神が岩戸を少し開いたときに太玉命とともに鏡を差し出した。天孫降臨の際瓊瓊杵尊に随伴し、古事記には中臣連の祖となったとある。

注4：延喜式祝詞 祈年祭 春日祭 広瀬大忌祭 龍田風神祭 平野祭 久度古開 六月月次 大殿祭 御門祭 六月晦大祓 東文忌寸部献横刀時の呪 鎮火祭 道饗祭 大嘗祭 鎮御魂齋戸祭 「伊勢大神宮」 二月祈年・六月十二月月次祭 豊受宮 四月神衣祭 六月月次祭 九月神嘗祭 豊受宮同祭 同神嘗祭 齋内親王奉入時 遷奉大神宮祝詞 遷却崇神祭 遣唐使時奉幣 出雲国造神賀詞 中臣寿詞

祝詞：凡そ祭祀の祝詞は、御殿・御門等の祭には、齋部氏祝詞まをし、以外の諸祭には、仲臣氏祝詞まをせ。

凡そ四時の諸祭に祝詞を云はざるは、神部皆常の例に依りて宣れ。其の臨時の祭の祝詞は、所司事に随ひて脩撰し、祭に前だち官に進りて処分を経、然る後に行へ。

注5：「魏志倭人伝（部分）」見大人所敬 但搏手以當跪拜 其人寿考 或百年或八九十年 「大人を見て敬する所は、ただ搏手し、以って跪拜に当てる。その人は寿考、或いは百年、或いは八、九十年。」

注6：「魏志倭人伝（部分）」其會同坐起 父子男女無別 人性嗜酒

「その会同、坐起では、父子、男女は別無し。人性は酒を嗜む。」 その会合での立ち居振る舞いに、父子や男女の区別はない。人は酒を好む性質がある。

（裴松之）注…魏略曰 其俗不知正歳四節 但計春耕秋収 為年紀

「魏略（*）いわく、その習俗では正月（陰曆）や四節を知らない。ただ春に耕し、秋に収穫したことを数えて年紀としている。」《*／「魏略」…魏の歴史を記した書、現存しない》

・魏略「春耕秋収為年紀」にある「春耕秋収」とは、正式には、魏略曰「其俗不知正歳四節但計春耕秋収為年紀」で、この『魏略』の記事を引用した『三国志』「東夷伝倭人条」に掲載のある記事のことです。

この文章には、「(倭人は)その俗、正歳四節を知らず。ただ春耕秋収を計って年紀と為す。」とあって、つまり倭人は春と秋でそれぞれ1年と数えており、これを「春秋二倍曆」と言う。春から秋・・・つまり田植えから稲刈りまでを一年、そこから次の春までの冬を一年と勘定して、一年間に二年あるという古代中国に始まる死生観である。

これが3世紀頃の古代日本人の通年観念だった、ということが考えられます。

ここから日本の史書は最初の神武天皇から応神天皇あたりまでの天皇の年齢を二倍にする着想を得たというのが今の史学の見方である。

すると100歳以上だった天皇たちの年齢は正しくは、「春秋二倍曆」を普通の「1倍曆」換算すれば 神武天皇は64歳・崇神は60歳・応神は55で崩御となって、現実的になるという考え方です。

裴松之（はいしょうし、372年-451年）は、中国の東晋末・宋初の政治家・歴史家。河東郡聞喜県（山西省聞喜県）の人。字は世期。裴珪の子。陳寿の『三国志』の「注」を付した人物として知られる。また、魏に仕えた裴潜の弟・裴徽の6世の孫に当たるといふ。子の裴駟は『史記集解』の撰者である。曾孫（裴駟の孫）には裴子野がいる。

注7：天皇の寿命（日本書紀）表 歴代天皇の在位と寿命 ○寿命80才以上

○	1	神武天皇	126(127)
○	2	綏靖天皇	83(84)
	3	安寧天皇	66(57)
	4	懿徳天皇	76(76)
○	5	孝昭天皇	113(113)
○	6	考安天皇	136(136)

○	7	孝霊天皇	127 (1 2 7)
○	8	孝元天皇	114 (1 1 4)
○	9	開化天皇	110 (1 1 0)
○	10	崇神天皇	118 (1 2 0)
○	11	垂仁天皇	139 (1 4 0)
○	12	景行天皇	143 (1 0 6)
○	13	成務天皇	106 (1 0 7)
	14	仲哀天皇	? (5 2)
○	15	応神天皇	110 (1 1 0)
○	16	仁徳天皇	142

「古代人の寿命」

縄文人の場合は、30才くらいと考えられています。これは、貝塚から発掘される骨から確定できるといわれます。しかし、弥生時代の人骨は発掘されること自体大変少なく、弥生人の骨は土に帰ってしまうといわれます。

縄文人は、貝塚の近くに骨を埋葬しました。カルシウム分の多い土に埋葬された骨は、土に帰らず残るといわれます。一方、弥生時代は稲作が始まっています。貝塚のようにカルシウム分の多い土には埋葬されなかったため、弥生人の骨は土に帰ってしまったのです。

佐賀県の吉野ヶ里遺跡は有名ですが、発掘された人骨によると、弥生人は渡来系らしい特徴を備えているといわれます。縄文人に比べると背が高く、平均寿命は30~40歳ぐらい。遺物には紐のついた毛髪もあり、髪を結っていたこともわかります。(ここでいう30歳は、15歳以上生存した人間の寿命です。)

弥生時代は、稲作が生活の基盤となり、鉄器や青銅器の使用が始まった時代といわれます。吉野ヶ里でも農耕によって飛躍的に人口が増加し、人々を統率する王も現れました。一般の墓地とは別に王族を祀る巨大な墳墓がそれを物語っています。

古代は幼児期の死亡率が高く、縄文時代~弥生時代の死亡率は50~60%という数字も見えます。大正末期に幼児期死亡率が、15%以上あったといわれますので、大袈裟な数字ではないかと思えます。

15歳以上に達した者の平均死亡年齢の時代変遷は、人口問題研究家の小林和正氏による

縄文時代：男31.1歳/女31.3歳

弥生時代：男30.0歳/女29.2歳

古墳時代：男30.5歳/女34.5歳

室町時代：男35.8歳/女36.7歳

江戸時代：男43.9歳/女40.9歳

(古人骨より推定)

1891~98年調査：男55.7歳/女57.1歳

1965~66年調査：男70.3歳/女75.0歳

(人口統計)

ちなみに、「平均寿命」とは、「0歳児における平均余命(後どれくらい生きられるか)」ですが、紀元前11世紀~1世紀「縄文時代」の日本人の寿命は、男女とも、14.6歳。紀元前8世紀~3世紀「弥生時代」3世紀~7世紀「古墳時代」に入っても、「縄文時代」と、ほとんど平均寿命は変わらず、「室町時代」(1338-1573)では15.2歳くらいと推定されています。

注8：天の〇〇「古事記」

(原文：)天地初めて發けし時、高天原に成りし神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神、この三柱の神は、みな獨神と成りまして、身を隠したまひき。

(訳文：)天と地が初めて分れて、高天原（タカマガハラ）に出てきた神の名前は天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）、次に高御産巢日神（タカミムスビノカミ）、次に神産巢日神（カミムスビノカミ）です。この三柱の神は、奥さんや子供のいない独神で、姿かたちもありませんでした。

国産み（訳文）

伊予之二名島（イヨノフタナシマ＝四国）は体一つに顔が四つあります。

顔にはそれぞれに名前があります。

伊予の国は愛比売（エヒメ）といます。

讃岐の国は飯依比古（イヒヨリヒコ）といます。

阿波の国は大宜都比売（オオゲツヒメ）といます。

土佐の国は建依別（タケヨリワケ）といます。

次に隠伎之三子島（隠岐の島の三つの島）を生みました。

別名を天之忍許呂別（アメノオシコロワケ）といます。

次は筑紫島（ツクシマ＝九州）を生みました。

この島も体一つで顔が四つあります。

それぞれの顔に名前があります。

筑紫の国を白日別（シラヒワケ）といます。

豊の国を豊日別（トヨヒワケ）といます。

肥の国を建日向日豊久土比泥別（タケヒムカヒトヨクジヒネワケ）といます。

熊曾の国を建日別（タケヒワケ）といます。

次には伊伎島（イキノシマ＝壱岐島）を生みました。

別名を天比登都柱（アメヒトツバシラ）といます。

次に津島（ツシマ＝対馬）を生みました。

この名前を天之狭手依比売（アメノサデヨリヒメ）といます。

次に佐渡島を生みました。

次に大倭豊秋津島（オオヤマトトヨアキツシマ＝本州）を生みました。

この名前を天御虚空豊秋津根別（アマツミソラトヨアキツネワケ）といます。

この八つの島を最初に産んだので、日本を大八島国と呼びます。

注9：天皇家の三種の神器（遺跡）

九州：壱岐島の「原の辻遺跡」 吉武高木遺跡 両迫間日渡遺跡 三雲遺跡 立岩遺跡
須玖岡本遺跡 平原遺跡 津古生掛古墳 平原遺跡 etc

畿内：小阪合遺跡 瀬戸神社旧境内地内遺跡 メスリ山古墳 桜井茶臼山古墳 etc

参考文献

- ・タッキー 816 みのおエフエム提供 二〇〇二年二月十四日放送
みちばたサミット第3回 老年のための古代史 歴史のなかの祝詞（のりと）
- ・新訂 古事記 角川ソフィア文庫 2008年7月
- ・日本書紀（上） 講談社学術文庫 2009年4月
- ・日本書紀（一） 岩波文庫 1998年5月
- ・倭国伝 講談社学術文庫 2010年10月